

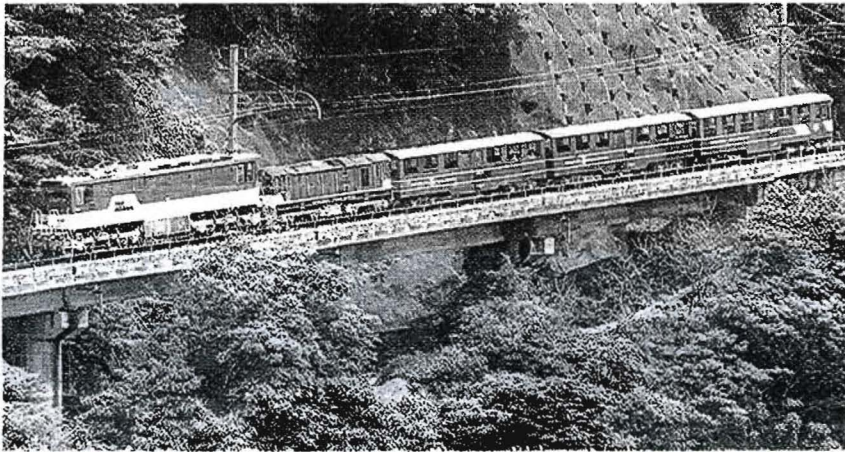
井川線(大井川鐵道)の歴史を本に

大井川鐵道元副社長の白井昭さん(せむし)愛知県知多市が、日本唯一のアプト式鐵道で知られる同社の井川線(川根本町千頭-静岡市葵区井川)をテーマにした「大井川鐵道井川線」を出版した。大鐵關連の本はS1が走る本線(島田市金谷-千頭)が中心で、井川線だけを扱うのは珍しい。歴史を振り返りつつ、将来の活用法も提案している。(佐藤隆)

日本唯一のアプト式

白井さんは名古屋工業道技術の博物館を運営専門学校(現名古屋工業)し、鐵道關係の本も三冊大)を卒業し、名古屋鉄出版している。「井川線道に入社。後に大鐵に出に愛着を持つ者の一人と向してS1列車の復活運して記録を一冊にまとめ転(一九七六年)やアプトておきたかった」と、話ト式導入(九〇年)などす。

に取り組み、八七年から井川線は戦前、電力会社九五年まで副社長を務め社が大井川水系の発電用ダム建設のため、資材運現在、ネット上で鉄搬用に敷設したのが源。



アプト式電気機関車(左端)を接続して山間部を走る井川線=川根本町で



井川線

1934(昭和9)年、この最初の区間が開通。路線距離25.5キロ。アプト式鐵道は2本のレールの間にある歯形のレールとアプト式電気機関車の床下の歯車をかみ合わせて進み、アプトいちしろ長島ダム間1.5キロで導入。他の区間はディーゼル機関車がけん引。南アルプスあぶらラインの愛称を持つ。年間利用は約16万人。

元副社長・白井さん出版

ダムの滞砂輸送など 将来の活用法提案も



出版した本を手にする白井さん(島田市金谷で)

經由で中流付近まで運んで流せば、河口で海岸浸食などが進む大井川の環境改善に役立つ」と説明。「今後の路線の使命も考えながら、読んでもらえれば」と話している。

B5判、四十八頁。発行は東京のネコ・パブリッシング。